

結び

二〇世紀のブラジルの、とくにリオデジャネイロの詩における〈時〉を扱いながら、私たちは、おそらく誰もが予想していただろうひとつの語について、ほとんど完全な沈黙を守ってきた。「郷愁 (saudade)」である。

ポルヘスはあるところで、文学においては語られるべきもっとも重要な一語は直接に語られることはなく、言葉はその周りをめぐって費やされる、ということを書いていた。私たちにとっての〈郷愁〉もそのようなものかもしれない。私たちがここで取り上げた四人の詩人、マヌエル・バンデイラ、カルロス・ドゥルモン・ヂ・アンドラーヂ、セシリア・メイレーリス、ヴィニシウス・ヂ・モライスにとって、他の数多くのブラジルの——また、ポルトガルの——詩人にとってと同じく、この語がもっとも重要なもののひとつだったということは疑いを容れない。そしてここで扱った、幼年時代、一瞬と永遠、祭り、死と幽霊、失われた時、人魚、といった主題は、それぞれの詩学における〈郷愁〉のさまざまな現れではないだろうか。

筆者は、フェルナンド・ペソーアがくりかえしたような、〈郷愁〉はポルトガル人にしかわからないものだ、という考えには組しないし、それはブラジル人にしかわからないものだ、さらには、”saudade”は翻訳不可能な語だ、という考えにも組しない。レヴィ＝ストロースは、この最後の主張を受け入れつつ、ノスタルジーが過去に向かうものであるのに対して、郷愁は現在の経験を表象するものである、としていた。この人類学者が理解していないのは、”saudade”のような語は、その定義を辞書の一項目に収められるものではなく、逆にひとつの語が何冊もの辞書——この名がふさわしくない、いわば逆さまの辞書——を必要とする、ということである。

ポルトガル語の世界において、詩人や作家の想像力、また、民衆の、あるいは大衆の想像力は、さまざまな形で”saudade”という語を用いてきた。仮にこの語が「翻訳不可能」だとすれば、それは概念の含みによるのではなく——実際、レヴィ＝ストロースは、概念をパラフレーズという形で「翻訳」してはいないだろうか——、ポルトガル語の世界におけるおびただしい数の使用例とのつながりが、翻訳された言語の世界においては断たれてしまう（と感じられる）からである。

この論は、「郷愁」のような、ある言語の想像力によって——とりわけ、もっとも広い意味での「詩」的なそれによって——〈聖別〉された語のための「逆さまの辞書」がどのようなものでありうるか、ひとつの可能性を示しているものとして読むこともできるかもしれない——とすれば、この語が避けられたのも当然である。定義されるべき語を、定義のなかで用いてはならないからである。普通の辞書においては、幾多の使用例から帰納された概念が記述されるのに対し、逆さまの辞書においては、ひとつの語から出発して、その概念の幾多の実践が演繹されるのである。

詩人論の形式を借りたこれら六つの章のなかで、一見すると関連のない議論が並べられているのは、このような意味で、実際にはそれらが主題論だからである。たとえばバンデイラのある詩は、彼自身の他の詩よりも、ハイデッガーの著作のある一節と強い絆を持っている。同様に、セシリア・メイレーリスのある詩は、彼女に影響を与えたとされる詩人

の作品よりも、カルティエ＝ブレッソンのある写真と強く共鳴している——。私たちが前提としたこのような考え方は、ひとりの作家の作品群は自らのうちでこそもっとも確固たる一貫性を持っている、という考え方ほど広く受け入れられてはいないとしても、それと同じくらい正当であり、同時に、同じくらいばかげたものである。

これら六つの章は、それぞれが独立したものでありつつ、すべての章がすべての章との関連を持っているが、しいて言うとするれば、第一章から第三章までが緩やかにつながっていて、同じように、第四章から第六章までが緩やかにつながっている。私たちの最大の導き手となったのは、一読して明らかのように、『失われた時を求めて』の著者マルセル・ブルーストである。

すでに述べたように、マヌエル・バンデイラとカルロス・ドゥルモン・ヂ・アンドラーヂは、ブルーストのこの小説に訳者として接していた。筆者が以前、ドゥルモンを修士論文で取り上げ、その詩想がヴァルター・ベンヤミンの思考ときわめて近いものであることについて考えたとき、筆者は、両者がともにブルーストの訳者であるという事実を知っていながら、忘れていた。そして、詩と時との関わりをあらためて考えようとしたとき、二〇世紀最大の〈時〉の哲学者と呼ぶべきこの作家の書いたものが、ベンヤミンとドゥルモンの着想に影を落としていたのかもしれない、と考えることになった（その根拠のひとつとして、ペーター・シヨンディの論文が果たした役割は大きかった）。

とはいえ、私たちはブラジルの詩人たちとブルーストを比較することを意図して試みたのではなく、ブルーストが〈時〉について考えたことのなかに私たちが取り上げた詩と響き合うものがあれば、それが自然に入り込んだ、と言うべきである。この論には、いわゆる研究対象である一次文献、それについて書かれた二次文献、また、直接は関わりがないが議論のうえで参考になる三次文献、という区別はなく、詩人、作家、批評家、哲学者などが、すべて等価に扱われている。主題論、という言葉で私たちが意味しているのはこのようなことである。

筆者は、どんな着想もたったひとりのものではありえないと考えている。同じことが他のひとりの他の言葉で発想されるということがありうる、それゆえ、すべての引用は偶発的なものであり、その文脈に同じくらいふさわしい引用、あるいはよりふさわしい引用と置き換えることは可能である、と。

私たちが一端を見せることができたと信じているのは、〈郷愁〉をめぐる詩想が、決してポルトガル語の世界のなかで完結してきたものなのではなく、実際には他の言語のおかげできわめて豊かになってきた、ということである。ヘルダーリン、キーツ、ボードレー、リルケ、ブルーストといった書き手たちの考えは、直接に間接に、ブラジルの詩人たちのなかに流れ込んでいる。さらに、逆に、ブラジルの詩が彼らの思考の可能性を広げてゆくということもありえなくはないとしたら、論文と呼ぶにはあまりに型破りなスタイルがここで取られたことも、全く報いのないものではない。

和田忠彦はあるところで、翻訳という営みを、「読んでいて響いてくる声、自分が聴き取った声」を日本語で再現すること、さらには、「日本語の内側にいる読者がいったん外に出て耳をすまさなければ聴き取れないような声として文字にすること」としていた。言葉の〈意味〉を移し替えるのではなく、「文字にすれば音の失われてしまう」自分のなかに聞こえている〈声〉をよみがえらせることである、と。

未だ著作を持っていない書き手にとって、書くことは、耳にしたことのない自らの声を探し求めることであり、さらには、——これが剩語であることを承知で言えば——自らの沈黙の声を〈翻訳〉することに他ならない。